

飛鳥・奈良と「汎ユーラシアのイラン文化」

青木健

16

イラン系民族と漢民族のコミュニケーション比較論

西域のコミュニケーションと漢民族のコミュニケーション

火焰山から吹き降ろす熱波に堪り兼ねて、日中をトゥルフアン市内のホテルで過ごす^{ごす}と決めたものの、この空白時間の中でも異文化の観察を怠^{おそ}ってはならぬ。この街の人口構成は漢民族が2割にウイグル人が8割と聞いたが、筆者が見た限りでは、両者は食事を摂る場所によってかなり截然^{せつぜん}と区別され、混淆^{こんごう}している様子はほとんど無い。イスラーム教徒たるウイグル人は清真料理店を、漢民族は中華料理店を利用している。

而して、筆者たち一行はこれまで専ら清真料理店を利用していたのだが、ここトゥルフアンのあたりから、微妙に会食の席上でのコミュニ

ケーション方法に変化が生じたように感じられた。それは、イランを出発してからタジキスタン、ウズベキスタン、キルギスと東進するにつけ、ついぞ感じなかったような違和感である。イラン系・トルコ系民族と漢民族を分かつ要素は、豚肉の食用習慣の有無だけではなく、会食の席でのコミュニケーション方法にあると筆者は思う。

*

*

スイースターンの事例

話しの順序として、西域以西におけるコミュニケーションの事例を幾つか挙げよう。2004年12月、筆者はイラン東南のスイースター州を訪問する機会を得た(『ユーロナラジア』第4号参照)。見渡す限りの砂漠の中、公共交通機関など見当たらないから、ザーヘダーンからチャーバハールまでの長駆630キロ、地元タクシーを借り上げた。この運転手が、道すがらにあった自宅で我々を歓迎してくれたのである。

その欲待の仕方たるや、アルコールは一滴も出さず、代わりにアフガニスタンから密輸したインド映画のワンシーンのテレビ上映がメインであった。インド人女性がカタックダンスらしきものを延々と踊る姿を眺めつつ、家庭料理を頂いた記憶がある。女性が公然と踊る姿など、厳格なイスラーム共和国であるイランでは本来「法度」なのだが、運転手は、この密輸ビデオにはその禁を破る価値があると考えているらしかった。

筆者は当初、「この運転手は偶然にもインド映画の大ファンなのであろう」と気にも留めなかったものの、次第に、ダンス好きはこの地域に広範囲に拡がる文化なのだと判明してきた。決して、アルコールでその禁を犯そうとしているわけではなく、女性のダンスに重点が傾いているのがイラン人のイラン人たる所以である。

ドウシャンベの事例

2014年9月、筆者はタジキスタンを訪れる機会を得て、首都ドウシャンベのホテルに宿泊していた(『ユーロナラジア』第5号参照)。このホテルの一階はレストランになっており、そこで夕食を摂るシステムだったのだが、我々が夕食を楽しんでいると、宴の途中で予告も無く若い女性ダンサーが現れて、ベリーダンスを踊ってくれた。初めてイスラーム圏を訪れた同行者のK氏は、実に真剣に、食い入るような眼差しでダンサーを注視し、感嘆措くあたわざる様子で何枚も写真を撮っておられた。中国留学組であるK氏にとっては、食事の席でのダンス披露は初めての経験であるらしかった。

筆者も気になって、踊り終えたばかりのダンサーに話しかけたところ、「トルコからの留学生で、学費を稼ぐ為にホテルのレストランで踊っている」との答えだった。厨房での様子を拝見しても、レストランのスタッフの中で差別待遇を受けている雰囲気は無く、寧ろダンサーの方がリスベクトされている風情が感じられた。このような場合、何とかなしにダンサーへの職業差別の感情に触れてしまい、決して気持ちの良いものではないのだが、タジキスタンでは不思議とそれが無かった。この状況を見るにつけ、如何に文化的観察眼が鈍くとも、この地域特有のコミュニケーション手段が、ダンスであることに思いを致さざるを得なかった。

イスタラフシヤンの事例

その数日後、筆者はタジキスタン・ソグド州の街イスタラフシヤンを訪問していた『ユーロナラジア』第7号参照。夕刻にホテルに到着したところ、大ホールでは盛大な結婚式の最中で、出席者の老若男女が思い思いに現地のダンスを踊って式を祝っていた。K氏にとっては、このような形式の結婚式が頗る物珍しかったらしく、チェックイン後も暫くは自室に入らず、階段の物陰から一心不乱に結婚式の踊りを観察しておられた。

而して、筆者が自室で2時間ほど寛いことから、夕食に出掛けようとしたところ、依然として華やかなネオンサインに彩られた会場でのダンスは続いており、タジキスタン人たちが踊り続ける忍耐力に敬意を抱かざるを得なかった。一体、人間は、これほど長時間にわたって、飽きもせず踊り続けられるものであろうか。そして、もう一つ感銘を受けたのは、階段の物陰で、K氏がスーツケースを持ったままの姿勢でダンスを鑑賞している姿であった。2時間この方、身じろぎもせず、タジキスタンの宴会作法に魅入られておられるようだった。

サマルカンドの事例

ここまではイラン系民族の事例であるが、今度はトルコ系民族に話題を移す。2015年9月、筆者はウズベキスタンの古都サマルカンドを訪問していた。嘗てのソグディアナの首邑（しゅいゆう）に足を踏み入れた以上、これは何としても地元（じゆん）の郷土料理を堪能せねばならぬと考えて、それらしきレストランへ入った時のこと、ステージ上に巨大なスピーカーが鎮座していて、その前の席に通され、何やら嫌な予感がした。

ソグド料理の末裔らしきもの（胡餅は即ちナンである）を出されて、頂こうとした瞬間、そのスピーカーから耳を聳するばかりの大音響が流れ、物陰からダンサーたちが登場した。その大音響たるや尋常なものではなく、筆者は音の物理的效果と云うものを初めて体感するに至った。何しろ、その大音響によって、皿の上のスプーンやフォークが小刻みに振動するのである。それに加えて、ダンサーたちが踊り狂うものだから、味覚を刺激される前に聴覚と視覚が強烈に刺激され、日本人の感覚では食事どころではない。だが、音楽と踊りのセットが、この地域の客人欲待のマナーなのである。

予想外の伏兵として、ここサマルカンドでは、ロシア風のマナーも浸透していた。ウズベキスタンの考古学者と同道したのだが、この伊達男が頻りにウオッカを勧め、しかも相手が飲み干すまで止めないのである。私は最初から「アルコールは飲まない」と旗幟を鮮明にしていた

ものの、物柔らかな京都人であるK氏は明確に断るでもなく、相手の善意によって飲まされ続けていた。良い方に解釈すれば、イラン・トルコ風に加えてロシア風の歓待も体験し、一回の会食で二重のコミュニケーション方法も堪能されたのである。ソシオロジーとしては充分に成立している。尤も、現実には、悪い方に解釈した方が正解だったようだった。

トウルファン事例

このように、歌と踊りでコミュニケーションを取る世界で活動してきたので、筆者はこれを意外とする観念が薄れていた。そして、そのままトウルファンまで到達し、ここで漢民族と相対するに至った。大方の日本人とは逆のコースを辿って、新疆ウイグル自治区に到達したのである。

その結果、トウルファン付近で、コミュニケーション方法が劇的に変化したことに気付かざるを得なかった。酒も煙草も嗜まない筆者にとつては当惑せざるを得ないことに、漢民族は何を差し置いても酒と煙草を勧めてくる。イランやタジキスタンでは、決してそのようなこととはなかった。しかも、漢民族にとつては、自分が飲む場合、吸う場合は、目の前の人間に勧めてから、自分でも楽しむのがマナーらしい。

漢民族は彼らの意味合いに於いて礼儀正しい人が多いのか、筆者の手許には、全く吸わない煙草が山のように蓄積されていき、処理に窮するところまでいった。

その代わり、彼らは歌ったり踊ったりしようという素振りは一切見せない。おそらく、食事の場での音楽に、始めから興味が無い。筆者は、イラン人研究者と会食する際、必ずと言っていいほど、「このレストランで掛かっている音楽はこれで良いか？好みに合うか？嫌だったら変えさせよう」と尋ねられるのに慣れていたので、「ここまで来て、音楽抜きで会食の方に違和感を覚えざるを得なかった。尤も、筆者の音楽センスなどお粗末で、どのイラン音楽が流れていたところで大差なかったのだが。」

*

*

漢詩の事例 ①

イラン系・トルコ系諸民族（彼らを「西域異民族」とは表現したくない）と漢民族の境界線たるトウルファン付近で、コミュニケーション方法が劇的に変わるとの仮説が正しいとして、それはどの程度まで時

代を廻れるだろうか。筆者は、その証拠を唐代の辺塞詩へんさいしに求めたい。

先ずは、盛唐の詩人王維おうい（701年～761年）が長安城の郊外で詠んだ「送元二使安西」である。

渭城朝雨浥輕塵 渭城の朝雨 輕塵を浥す

客舍青青柳色新 客舍青青 柳色新たなり

勸君更盡一杯酒 君に勸む 更に尽くせ一杯の酒

西出陽關無故人 西の方陽関を出づれば 故人無からん

中国と同じ飲酒文化圏に属す日本人がこの漢詩を読む場合、しばしば「故人無からん」の方に重点が置かれる。しかし、筆者の観点からすると、寧ろ「更に尽くせ一杯の酒」の方に痛切な哀感が籠もっているように思う。陽関を越えてイラン系・トルコ系諸民族の住まう土地へ赴いた場合、飲酒文化そのものが希薄になり、代わって漢民族の習慣には無い歌謡と舞踏の文化に接することになる。西域へ旅する漢人にとっては、知人がいないことは相対的な障碍だが、コミュニケーション手段そのものが変わってしまうのは絶対的障碍だったであろう。

漢詩の事例②

続いて、初唐の詩人王翰おうかん（687年～726年）の「涼州詞」である。

葡萄美酒夜光杯 葡萄の美酒 夜光の杯

欲飲琵琶馬上催 飲まんと欲すれば 琵琶馬上に催す

醉臥沙場君莫笑 酔うて沙場に臥す 君笑う莫れ

古來征戰幾人回 古來征戰 幾人か回る

こちらは、「送元二使安西」に比べると、遥かにイラン系文化に寄せた詩である。きつと、長安城の郊外で詩を詠んだ王維に比べて、王翰の方がより西域文化に馴染んでいたのだろう。葡萄は、中世ペルシア語でブーダクと発音する西アジア原産の果物。夜光の杯は、ホータンの玉で製作した杯。琵琶は、サーサーン朝ペルシアのウードを起源とする弦楽器。もしペルシア語で詩を詠むとしたら、音楽と旋舞の描写が欲しいところだが、流石は漢民族である。これだけイラン系の道具立てを揃えつつ、後半で急旋回して、結局は酒に泥酔する話に落ち着いている。

漢詩の事例③

三つ目は、盛唐の詩人王之渙（688年〜742年）の方の「涼州詞」である。

黄河遠上白雲間 黄河遠く上る 白雲の間

一片孤城萬仞山 一片の孤城 萬仞の山

羌笛何須怨楊柳 羌笛何ぞ須ひん 楊柳を怨むを

春光不度玉門關 春光は度らず 玉門関

玉門関付近では、漢民族の別離の習慣（折楊柳）を表現する術がないことと、イラン系・トルコ系民族（羌）の吹く笛が醸す異郷の情緒を掛け合わせた漢詩である。ただ、漢文学の世界ではその解釈で良いのかもしれないが、ペルシア文学の世界で「別離の笛」と云えば、ジャラルルツディン・ルーミー（1207年〜1273年）によるペルシア語詩『マスナヴィー』の冒頭を想起せざるを得ない。

聞け この葦笛が いかにかに語るか

幾多の別離を 嘆くそのことばを

イラン系民族の間では、根元から切り離された葦笛の音色こそが、

別離を表すに相応しい。「羌笛」が「葦笛」であるとの保証はないし、王之渙がイラン系民族の間で語り伝えられる「葦笛の歌」を知っていたかどうかは定かではない。しかし、仮に「羌笛」が「葦笛」で、王之渙がその故事を知っていたとしたら、第三句はイラン系民族が別離を表す「葦笛」と漢民族が別離を表す「楊柳」を掛け合わせたことになり、ペルシア語文化圏と漢語文化圏を重畳する文学技巧と評価できる。そうでなかったとしたら、「羌笛」は、単に漢民族にとつての西域情緒を示す為のアイコンに過ぎないが。

漢詩の事例④

最後に、盛唐の詩人岑参（715年〜770年）の「胡笳の歌」である。

君不聞胡笳聲最悲

紫髯緑眼胡人吹

吹之一曲猶未了

愁殺樓蘭征戍兒

涼秋八月蕭關道

北風吹斷天山草

崑崙山南月欲斜

君聞かずや胡笳の聲 最も悲しきを

紫髯緑眼の 胡人吹く

之を吹いて一曲 猶未了らざるに

愁殺す樓蘭 征戍の兒

涼秋八月 蕭關の道

北風吹斷す 天山の草

崑崙山南 月斜めならんと欲す

胡人向月吹胡笳

胡人月に向かつて 胡笳を吹く

胡笳怨兮将送君

胡笳の怨み 將に君を送らんとす

泰山遙望隴山雲

泰山遙かに望む 隴山の雲

邊城夜夜多愁夢

邊城夜夜 愁夢多し

向月胡笳誰喜聞

月に向かつて胡笳 誰か聞くを喜ばん

こちらは「胡笳」であるから、疑いようも無く「葦笛」である。しかも、吹いているのは「紫髯緑眼の胡人」とされる以上、まず間違いなくソグド人であろう。月に向かつて吹いているとなると、マニ教徒かとも思うが、そもそも本当に月に向かつて吹いていたのか、月光の中で吹いていたのか判然としない。

漢民族の視点から見た場合、「胡笳」が象徴的な意味を持つことに注目したい。詩中の文学的効果としては、「胡笳」を無作為に挿入しているだけのような気もするが、西域の情景の中に措くと、これが神秘的な効果を生み出している。少なくとも、語感だけで強度に想像力を刺激するのではなければ、岑參もこんな「胡笳」の使い方をしなかっただろう。ここでの「胡笳」は、漢民族が自国文化を中心にした場合の「エキゾチズム」である。

同じ事態をイラン系民族の視点から眺めると、状況は自ずから異なる。徹宵して音楽と踊りを愉しむのは、彼らとしては当然の行為であって、なんら特筆すべきことではない。イラン系の音楽が短調を基調にし、

概して物悲しく響くのは事実だが、それが彼らの日常である。それを漢民族の側で「愁殺す」と受け取るのは、あくまで漢民族側の事情による。きっと、唐代までの漢民族の間では、哀調を帯びた音楽が乏しかったのであろう。

両者に対して等距離を取るべき日本人としては、漢民族と一緒に「愁殺さ」れている義理はない。そして、心理的事実としては、「胡人」たちの方でも、「あの漢民族たちは一向に歌も歌わず、踊りも踊らない。何が愉しいのだろうか？ タクラマカン砂漠を東に越える」と、途轍もない異郷に來た気がする」と考え、遊子の情が双袖を潤していた（漢文的な表現だが）に違いないのである。ここでは、飽くまで公平に両者の事情を汲み取らなくてはならない。

*

*

結論

帰国後、念のために、西安出身の同僚に、このコミュニケーション手段の差異について意見を求めてみた。すると、やはり「新疆の人たちは、何かと言っては踊っているイメージで、漢民族とは文化が違う

「ようだ」との回答を得た。彼女は、1970年代に小学生だった頃、相互理解の為に、授業で新疆の民族衣装を着て踊っていたそうである。逆説的だが、この事実が、現在でも西域民族と漢民族の間に文化的ギャップがあることを示している。

斯くして、筆者は、このトゥルファン付近では、イラン系民族（現在ではトルコ系民族）と漢民族が、御互いのコミュニケーション手段の差異を意識しながら雑居し続けているとの結論に達した。イラン系民族と漢民族は、例えば、文章を書く場合、驚くほどの煩瑣と技巧を良しとする点で共通する。ペルシア文学のサブケ・エラーギー（注）と漢文学の四六駢儷体は、職業的なまでの洗練を凝らしている点、及び本質的には観賞用である点に於いて、殆ど違いがない。

しかし、コミュニケーション手段の点では、両者は驚くほど異質な発達を遂げた。漢民族の飲酒文化は、『詩経』の中でも肯定されているように、儒教と云う大きな文化的枠組みの中で不動の座を占め、政治体制が変わってもその位置付けは一向に揺るがない。イラン系諸民族の歌謡・舞踏文化は、現在の彼らのバックボーンをなすイスラームと云う枠組みの中で、必ずしも明確に位置付けられてはいないが、おそらくゾロアスター教の時代から継承した土着的要素として、根強い生命力を保っている。漢民族の「辺塞詩と飲酒文化」と云う額縁の中でトゥルファンの文化を鑑賞するのも結構だが、筆者はイラン的な光を当てて、トゥルファンの昼下がりを楽しんだのである。



あおき・たけし

1972(昭和47)年生まれ。東京大学文学部イスラム学科卒業後、同大学大学院人文社会系研究科アジア文化専攻博士課程修了、博士(文学)。現在、静岡文化芸術大学・文化芸術研究センター教授。『ゾロアスター教史』(刀水書房)、『マニ教』(講談社選書メチエ)、『古代オリエントの宗教』(講談社現代新書)など著書多数。

注記

「サブケ・エラーギー(イラク・スタイル)」は、イスラーム期の近世ペルシア文学における技巧の一種。前代までの素朴な「サブケ・ホラーサーニー(ホラーサーン・スタイル)」に対して、宮廷頌詩に由来する豪華絢爛たる修辭に特徴がある。